

川上村立図書館・森と水の源流館 開館10周年記念

十年目の発見！はじまりの郷で - 【自然×歴史】複合フォーラム  
報告書（講演録）

ネイチャーフォトグラファー 内山りゅう氏

日本の美しい水・川上村の自然の魅力 『レンズに映った清流の宝物』

立正大学文学部教授 三浦佑之氏

『古事記にうつる源流の郷』

平成24年11月



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語



川上村立図書館・森と水の源流館 開館10周年記念

十年目の発見！ はじまりの郷<sup>くに</sup>で - 【自然×歴史】複合フォーラム  
報告書（講演録）

ごあいさつにかえて 特別寄稿 P 4

吉野歴史資料館長  
池田淳氏

【自然編】

2012年7月16日

P 6 - P 23

日本の美しい水・川上村の自然の魅力

『レンズに映った清流の宝物』

ネイチャーフォトグラファー

内山りゅう氏

P 26 - P 42

『古事記にうつる源流の郷』

立正大学文学部教授

三浦佑之氏

【歴史編】

2012年10月21日

共催 川上村教育委員会・川上村立図書館・森と水の源流館（公益財団法人吉野川紀の川源流物語）

支援 社団法人近畿建設協会

後援 国土交通省近畿地方整備局紀の川ダム統合管理事務所、奈良県、  
環境省きんき環境館（近畿環境パートナーシップオフィス）  
吉野川紀の川流域協議会、奈良県川上村、一般財団法人奈良県ビジターズビューロー  
協力 NPO 法人 奈良 21 世紀フォーラム  
「奈良 山と森林の月間」協賛イベント（【自然編】のみ）

この講演録は、後日音声記録から聴きお越したもののため、講師等に文責はありません。



## 自然と人の営み

吉野歴史資料館長 池田 淳 氏

吉野川流域の自然景観が、吉野町の上市付近で大きく変化することは、近世の本草学者貝原益軒が気づき、「上市より下八河のわたり広し上市より上八両山の間を流れて河のわたりせ八し、両山おくの方甚高し、山間に淵多し」と『吉野めぐりの記』に記している。川上村を含めた吉野川上流域は、高い山と山に挟まれ、川幅が狭くなり淵が多く、下流は川幅が広くなるという。

この景観は、吉野では至極見慣れたものである。この見慣れた自然景観が吉野に暮らす人々の営みに大きく影響を与えていた。

その一端をいえば、上市より上流の景観は、『懐風藻』に載る多治比広成の漢詩の「高嶺嵯峨多奇勢。長河渺漫作迴流」そのままである。広成は、こうした吉野の自然は、中国の神仙境と同じで、ここ吉野も吉野川の漁師美稲と天女柘姫が会うような場所、すなわち神仙境なのだと言っている。古代の人々は、吉野川上流域の自然景観に神仙境を見出したのである。

これに対して、上市より下流は、吉野川が大河のような流れになる。流れが緩やかになるためこの付近は、室町時代には川上の材木も含めてその集積地となり、これを商う材木商たちが集住し、良質な吉野の材木が消費地へ運び出されていった。

上流と下流の境界に位置する妹山の麓に鎮座する大名持神社は、地元では大汝宮と呼ばれ、「オオナンジ」と読まれる。「ナンジ」とは慶長年間に編さんされた『日葡辞書』に「難き事 危険な、すなわち厄介な事」とある。吉野川上流域の峻嶒な山々と蛇行し激流が続く吉野川の流れが人々に「危険」をイメージさせたのであろう。その妹山の下吉野川には、潮淵という淵があり、潮が湧き出していたという。潮水の正体は塩分を含んだ炭酸の温泉で、その成分が淵の水を潮水と信じさせ、奈良盆地の人々が大汝詣りをする場となる。

ところで、吉野川上流域の温泉は、炭酸塩泉がほとんどである。塩分は地中の鉄分を酸化させ、丹生を連想させる赤色の水を発生させる。川上村に丹生川上神社上社が鎮座していることも深く関わっているのかもしれない。

吉野での人の営みは、自然と共にというより、自然に包まれ、導かれた営みだったように思える。日々の営みが繰り返され、積み重なって歴史は成り立っていく。であるならば、吉野では、歴史と自然を共に知り、学ぶことは誠に意義深いことである。これからもこうした企画が続けられんことを希求してやまない。



日本の美しい水・川上村の自然の魅力

# 『レンズに映った清流の宝物』

ネイチャーフォトグラファー

## 内山りゅう氏

(うちやま りゅう) 1962年東京生まれ。東海大学海洋学部水産学科卒業。“水”に関わる生き物とその環境の撮影をライフワークとしている。とくに淡水にこだわり、図鑑や写真集などを精力的に発表する。1999年、住まいを和歌山県白浜町に移し、“清らかな水”を取り巻く水環境にレンズを向け、創作活動を続けている。

主な写真集に『アユ』(平凡社)、『大山椒魚』(ビブロス)、『いきものアート・シリーズ全6巻』(ジュリアン)他があり、主な著書に『たんぼの生き物図鑑』『フィールドブック淡水魚』(山と溪谷社)、『水の名前』(平凡社)、『水に棲むものたちの物語』(バジリコ)他多数がある。近年は、子ども向けの写真絵本『へびのひみつ』『たんぼのカエルのだいへんしん』(ポプラ社)、『キンダーブック はるのおがわ』(フレーベル館)他を発刊。テレビ番組では「NHK ダーウィンが来た!」「情熱大陸」「報道ステーション」「奇跡の地球物語」などがある。

2012年7月16日(祝 奈良県山の日川の日)

14:00~15:30

川上総合センターやまぶきホール

参加者 約180名

豊かな川というのは、日本中にあるんだな。

僕が見てきた自然、川上村の魅力をお話したいと思います。よろしくお願いします。

僕は東京生まれの東京育ちで、今は和歌山県の白浜町に住んでいますが、紀伊半島には縁もゆかりもない人間でした。うちの父方は東京日本橋の築地で、父が継がなかったもので今は継いでいませんが、僕で8代目になる本当の江戸っ子です。その生粋の江戸っ子の末裔である僕は子どもの頃、東京にある多摩川という川で魚を採ったりして過ごしました。僕が子どもの頃は本当に高度成長期の頃で、多摩川はすごく泡だらけで「多摩川は汚いから行ってはいけないよ」と親から言われ育ちました。

そんな僕が写真を通して各地の川を見て、「本当に豊かな川というのは日本中にあるんだな」ということを痛感するようになりました。

大学は海洋学部で、専門は魚類学です。淡水魚の分類を大学の時にずっと勉強していました。ただ単に淡水魚の研究ではなくて、両生類、爬虫類、水生昆虫など、水に関わる生き物には魅力を感じていました。そして淡水環境というのをもっとグローバルに見たいということで、淡水を基軸にいろんな生き物を撮影するようになりました。著作本は今までに50~60冊ぐらい作っています。最近では生き物の番組、NHK『ダーウィンが来た』などの番組の制作に携わるようになり、いろんな淡水環境の生き物を知ってもらうような仕事をしています。

今日は、そういった淡水の生き物のお話なんですけど、前半と後半に大きく2つに分けてお話をしようと思います。前半は、僕がずっとこだわってきた“淡水とは何か、どういう環境のことをいうのか”ということ。後半は“川上村にどういう生き物がいて、どういった自然があるのか”ということを写真でお見せしたいと思っています。





地球上すべての水で、われわれが使える水は0.01%。

(写真)これは淡水の水滴です。淡水は英語で『フレッシュウォーター』と言います。これは海水の『シーウォーター』に対する言葉なのですが、文字通りフレッシュな水のことを指します。実は淡水は、とても貴重な存在です。

覚えておいていただきたいのは、淡水というのは地球上にどのくらいあるのかということなんです。ポストークという有人宇宙船に乗っていたガガーリンが言った「地球は青かった」という有名な言葉がありますが、地球が青く見えたというのは海の水にほかならないんです。実は地球上の全ての水の97%以上は海の水なんです。残りの3%が淡水かといえばそうではなく、2%が氷河など固体の水なんです。残りの1%は我々が使えるのかというとそうでもなく、その中でわれわれが使える水は0.01%しかないんです。

地球全部の水をお風呂1杯の水に例えると、お風呂1杯の水に対して淡水はコップ1杯とされています。地球全部の水を1.5リットルのペットボトルとすれば、淡水はスポイドで垂らした1滴しかないと言われています。そのくらい淡水というのは少く、貴重だということです。

淡水の怖いところは地球が始まってから数万年の間、水の量は全く増えていないことです。これからどんどん人間は増えて、2050年には90億人に達すると言われています。日本は人口が減っていますが、世界的には人口増加に伴って食糧不足が起こると言われている中で水の量は決して増えていない。これがとても大事なキーポイントです。

(写真)シベリアの空撮です。真ん中に見えている川はアムール川です。紀の川の中流域ぐらいの規模になると思います。いかに大きい川かわかるとは思いますが、これが全て凍っています。水は淡水で飲める水ですが、実際に利用することができない、永久凍土と言われる年中凍った状態の水です。

僕はシベリアが好きで4回ほど取材に行っていますが、これは8月の一番暑い時に行った時のものです。キャタピラーのついたロシア製の戦車のおまけみたいなものに乗ってずっとシベリアの内陸に入っていました。8月でも万年雪がありまして、年中溶けることはありません。なので、この水は利用することができません。

(写真)シベリアの空撮です。延々と針葉樹の森が広がっています。こういった森をタイガといいます。森から入ってくる栄養分がこの川に入っていきます。ものすごく広かったです。何も無いところを僕らはヘリコプターと飛行機で4時間も飛んだのですが、その3時間ぐらいは景色が全く変わらなかったです。人工物は何もなかったです。ここで不時着したら助からないかなと思うぐらい広大な土地がロシアには広がっていました。

僕の仕事は地球の辺りな場所に入ることが多いです。日本に住んでいると自然を人間が征服して住んでやっているとイメージがとてもあると思うのですが、こういうところ

に行く人間なんてものは、虫けらのようなちっちゃい存在で、住まわせてもらっているというような謙虚な気持ちになります。

(写真)東アフリカのケニアで、大地溝帯といって地球の割れ目があります。3,000km ぐらいの割れ目があって、そこにあるナクールという湖です。写っている鳥はフラミンゴです。このpH(水素イオン濃度)が、8.5あるんです。水道水が7前後と言われているので強アルカリの水です。広大な容積の湖なんですけど飲むことができません。ちなみにフラミンゴはピンク色をしていますけど、これは強アルカリ性の水に棲む藻類を食べているので色素沈着をおこしているからピンク色になります。白浜にはアドベンチャーワールドというパンダのいる遊園地があるんですけど、そこで飼育しているフラミンゴは普通に飼育しているとどんどん色素が抜けてしまってピンク色ではなくなってしまうらしいです。色素を餌に混ぜて色を保っていると聞いています。

(写真)アフリカ、ケニアのアンボセリ国立公園です。サバンナの中に川が流れていて、アフリカゾウです。アフリカでもこういった水のある場所というのはとても少ないです。こういった場所は生き物にとってとても重要であるということです。サバンナや砂漠に湧いている水のことを『オアシス』と言います。

(写真)メキシコです。チワワ砂漠という小さい砂漠の延長上にあるクアトロ・シエネガスというきれいな湧水です。チワワ砂漠は犬のチワワの原産地と言われています。クアトロ口というのは「4」という意味ですが、「四方八方」という意味もあって、チワワ砂漠の中にこういった池が200ぐらいまとまってあります。昔、NHKさんの撮影で入った時の写真です。この水もメキシコのシエラ・マドレ山脈に降った水が地下を通過して湧き出していますが、1万年ぐらいの時間をかけて濾過して湧き出していると言われていています。そういった水を『化石水』と呼んでいます。実は透明度がとても高いです。

(写真)この水もpHが8以上で非常に高く、強アルカリ性なんです。だから泳いでも水は絶対に飲むなと言われていました。現地の人はこの水を飲み水として利用できません。飲みたいけれど飲むことはできない水です。この場所は『砂漠の中の水族館』のようなタイトルでNHKさんで放送しましたが、非常に多様性が高い場所でした。周りが砂漠なもんですから、砂漠を越えて分散することができないので、クアトロ・シエネガスの固有種、つまり世界でここにしかないというものばかりが見られるというちょっと特殊な環境でした。ここにシクリッドと言われている魚もいますし、亀やスッポンもいますが、全てここにしかない固有種でした。

(写真)これは水中で、50mくらい何も遮るものがなくて、スカッと見えるぐらいの信じられない透明度で、水はとても美しいですが、人が利用することはできない水です。

(写真)東南アジアのマレーシアです。水がすごく濁っています。流れも日本ほど速くなくて、どっちが上流だろうと考えてしまうほどゆっくり流れている川がほとんどです。

葉っぱがいっぱい溜まっています。マレーシアのタマンネガラという国立公園に行った時の写真です。この落ち葉からタンニンという物質が溶け出て、それが水に茶色い色をつけてしまうんです。よく釣りをする人が北海道で茶色い水が流れているのを見て『チョークストリーム』という言い方をします。汚いというわけではないのですがタンニンで水に色がついてしまうんです。上流には人は全く住んでいませんし、マレーバクなどが歩き回る原生林の中です。僕たちはテントを持って行って何泊もしながら船で源流に上がって撮影をしました。水自体は全然汚くないので、この水で歯磨きをしたりポイルしてお茶を飲んだりご飯を食べたりしていましたが、見た目は茶色で濁って見えました。



(写真)ロシアのバイカル湖です。以前1ヶ月ぐらいずっと旅したことがあります。バイカル湖は、目に見える淡水の例としては世界最大です。最も古くて最も深い湖です。長さが600kmもあるので、見た感じはほとんど海です。世界の全ての湖の4分の1がここにあります。面積は琵琶湖の50倍とされています。バイカル湖も相当水がきれいです。周りが全て針葉樹でタイガに囲まれて、人も住んでいないので汚れてないということです。水の透明度は抜群です。透明度というのは船の上から白い円盤を深いところまで沈めていって見えなくなるところまでを測りますが、一時期バイカル湖は40mまで見えて世界で一番美しいと言われていました。今は多分摩周湖の方が美しいかと思いますが、バイカル湖か摩周湖かどちらかだと思います。僕がバイカル湖に行った時には40mだと説明を受けました。バイカル湖の一番深いところは1,600mです。船長さんに「ここが一番深いよ」と言われて覗き込んだのですが、あまりの深さにびっくりしました。とても見えるものではないですが、1,600mといえば深海ですから。この水は僕たちは毎日すくって飲んでいました。

(写真)世界で唯一淡水のアザラシが住んでいるところです。バイカルアザラシという小ぶりでぷくぷくしたアザラシがいて僕も見ることができました。すごく臆病なアザラシで、望遠レンズを持っていったのですが風向きが逆になってしまって全く近づくことができませんでした。頭だけちょっと出すぐらいだったので、とても写真を撮れるような状態ではありませんでした。この美しい透明度を保っている理由は、人が住んでいなかったりタイガに囲まれていたりするためですが、最も大きな理由として挙げられているのは、ここにある海綿動物です。バイカル海綿と言われる動物でスポンジ状になっているのですが、これが水を濾過しています。水深10mあたりにこういうのがニョキニョキ生えています。これはバイカル湖の固有の生き物です。この時も8月に行ったので気温は30あるんですが、水温は10ちょっとでした。ものすごく温度差がありまして、結構過酷な条件で潜ったのを思い出します。

美しい川があるということは、実はとても大事なことだと思います。

(写真)日本に帰ってきました。僕が昔撮った写真で東京郊外の川です。東京って、夏になるとこんなに人が来るんです。昨日川上村を案内してもらっていた時にも、大阪や奈良の方が川原でバーベキューをやっているのを見ましたが、こんなには来ないでしょう？車の数がすごいです。川っていうのは泳いだり、リラクゼーションの場になるのです。癒しの場として川はあるってことです。

(写真)この川は多摩川上流にあってニジマスやヤマメが放流によって生きていて、水はまあまあきれいです。やはり美しい川というのに人は集まります。惹きつけられます。東京の人たちは海にも行きますが、混んでいても川にやってくるってことです。美し

い川があるということが実はとても大事なことだと思います。

(写真)これは僕の地元の和歌山県の富田川です。大きな淵がここあって、子どもたちが夏になると飛び込みをする場所です。僕は東京育ちなので子どもの頃に川でそうやって遊んだことがありません。川上村のみなさんには、そういう経験があると思いますが、子どもの頃にそういう経験をしてきたかどうかというのは、後になってかなり違います

僕はこういうことをしたかったので、この歳になっても、川に行くとすごく楽しいんです。だから子どもたちが飛び込んでいるのを見ると羨ましくて仕方がないですね。この淵は3m以上あって危なく思えるのですが、子どもたちを見ていると「小学生はこの段まで、中学生はここまで行っていい」というルールがちゃんとあったんです。小さい子が上に行こうとすると大きい子が「ダメダメ。ここは子どもはダメだよ。また来年」と止めています。子どもたちの中にちゃんとルールがあるんです。危ないだけじゃなくルールの中でちゃんと遊んでいるというのがすごいなと思って僕は見ていました。

僕は、最近各地の川を見て回っているんですが、こういった深い淵、カップ淵ですね、「あの淵に行くと危ない、溺れるよ」と言われるような淵は本当に減っています。これは川の環境が悪くなっているからです。山から土砂が入ってきて埋まってしまっているということが大きいと思います。多分みなさんが子どもの頃に遊んだ深くて気持ちの悪い淵は、今はもうないと思います。僕が今までで一番深いと思ったのは四万十川の淵です。その淵は水深が11mありました。そういう川はまずないです。僕の地元の熊野川の支流に6mの淵が残っていました。でも本当に深い淵っていうのはないんです。僕はその川が健全な状態で保たれているかどうかというのは淵があるかないかでわかるような気がしています。もしあちこちの川に行かれる機会があれば深い淵を探してみてください。本当になくなってきていると感じています。



今世界中で水の争奪戦が始まっていると言われていました。

(写真) ロシアのハバロフスクという街の郊外にあるアムール川です。僕はロシアが好きで4～5回通っていました。少しだけ砂浜があって、ここで海水浴というか淡水浴をしています。すごく広い川で川幅は約3kmあると言われていました。ロシアの人たちが憩いの場として川を使っています。でも実際に見てみると川はこんなに濁っています。ハバロフスクはアムール川の最下流に位置する街なのでいろいろなものが流れ込んできて川を汚しています。水の色は日本人からすると、とても美しくは見えません。この川の上流は中国の黒竜江という名前で、源流は中国になります。

今から10年近く前に、中国の黒竜江で化学工場が爆発して大量の化学物質が黒竜江に流れ込んだというニュースが流れてきました。その後に僕はロシアに行きましたが、ロシアの人たちは「中国人たちが水を汚した」とすごく怒っていました。それはハバロフスクの人たちはこのアムール川の水で生活していたからです。そこに化学物質が入ってきたからで、実はロシアは中国に対して遺憾の意を示して「どうにかしてほしい。もう化学工場を川の近くに作らせないように」と言いました。僕の知り合いのロシア人も「あんなことをされるとたまったもんじゃない」とさんざん言っていました。

そのようなことが、今世界中で起きています。アムール川の場合は下がロシアで上が中国になっています。世界中では、国境をまたぐ川がほとんどです。その川のことを『国際河川』と言います。例えばアフリカのナイル川は10カ国が川に接しています。ヨーロッパ最大のドナウ川は17カ国が川に接しています。最近よくニュースで聞くヨルダン川はアラブとイスラエルの紛争地帯で、火種はヨルダン川で起きています。そしてスロバキアとハンガリーの紛争もドナウ川を基軸に起こっていますし、南米のブラジルとパラグアイではラプラタ川で水を取る取らないの紛争が起きそうになっています。今世界中で水の争奪戦が始まっていると言われていました。争いの火種になっているのが実は“水”になります。

(写真) アムール川に浮いていた戦艦です。これは中国に対する牽制の意味があります。

このようにた「川を通じて国際紛争」、「水の争奪戦」が各地で起こるといふ専門家は多いです。

(写真) ケニア北部の砂漠の中にあるトゥルカナ湖です。この湖の水は90%がエチオピアのオモ川から流れ込んできています。そのオモ川にギベ3という、多分アフリカ最大になると言われているダム建設が始まっています。ダムができることによってトゥルカナ湖の水位は間違いなく下がるだろうと言われていました。そのギベ3を作る資金は中国が出していると言われていました。実は中国は今、アフリカに対してお金をつぎ込んでいます。これは人口が増えていくに伴って食料や水を確保したいということがあってお金を出していると言われていました。

シンガポールに行った時に思ったのですが、シンガポールも最近色々と問題を抱えているようです。ご存知の通り、シンガポールは東南アジアの中ではイギリス資本で英語を話せて貿易で食べている。東南アジアでは別格的な国で、小さい国ですがお金がすごくあります。だからビル群が新宿みたいな感じです。そんなシンガポールでは人口が増加しています。お金はありますが、川がありません。それで隣のマレーシアから買えばいいということになりました。マライオンが見える大きな橋の横の道路の脇に銀色の大きな送水管があります。それが最近マレーシアは国として力をつけてきています。クアラルンプールなどに行くとビルが建っていてほとんど都会です。以前は発展途上国のイメージがありましたが、今は発展が著しいです。それでマレーシアとシンガポールに経済的な摩擦などが起こった時、マレーシアが「じゃあ水を閉めてしまう」ということになり、シンガポールは「それはやめてくれ」となります。今までシンガポールは「買ってやる」という気持ちでいたのに、マレーシアに水栓を止められることになると立場が逆転しそうだということになります。困ったシンガポールの人たちは海水を淡水化しようという話になりました。膜を使ったりバースのシステムを使って海水を淡水化するのですが、その技術は日本が特許をいっぱい持っています。日本からもいっぱい技師が行っています。急に海水を淡水化することを始めましたが、まだ 30%ぐらいで、やはりマレーシアから水を買わないといけません。だから頭を下げて売ってもらわないといけない立場になってきています。





水を持っていることが、どれだけ大きなことかを知っていただきたい。

水を持っているかどうかによって国同士の力関係が変わってくるのが、ここ数年間で明らかになってきています。20世紀は化石燃料である石油を制した国が世界を制すと言われていて、サウジやアラビアの人たちが牛耳ってきました。「20世紀は石油の世紀」と言われました。でも「21世紀は水の世紀」と言われています。「水を制したものが世界を制す」それが間違いないと思います。

では、水をどこから確保するかということがとても大事になってきます。いま僕たちが飲んでいるのは、ほとんどは河川水です。一部湧水を使いますがほとんどは川の水です。その飲料用に使える河川水は地球上でどれくらいあるかということと0.0001%の水しかないというデータがあります。これはショックなニュースです。それなのに2050年には人口が90億人を超えると言われていています。その中でどうやってこの少ない水を分けていくのかということが、すごく重要な話になります。

水を持っているということがどれだけ大きなことかということを知っていただきたいと思います。

僕が子どもの頃は「水と空気はタダ」みたいなことを言っていました。「湯水のように使う」など、日本人の言葉の中で水というのは価値のないもの、無限にあるものという感覚でした。また、子どもの頃に水をペットボトルで売るなんていうことは考えてもいませんでした。今の若い人は水をペットボトルで飲むのがカッコイイというか、普通になってきています。

海外から日本に戻ると、日本の水道インフラはすごいと思っていました。日本の水道はすごいです。水道をひねって飲める水が出てくる国にはないです。海外で一番苦労するのは水の確保です。生水を飲んでお腹を壊すのが怖いのでホテルの水も沸かしてペットボトルに詰めて持って行ったりしていました。水の確保ができないことが本当に多いです。

前にインドネシアやマレーシアの華僑のお金持ちの家に招待されて回ったことがありましたが、彼らがまず自慢したのは家よりも庭にある池です。飲めるのではというくらい澄んだ水に、日本から輸入した錦鯉が泳いでいるんです。これが富の象徴です。「これだけ水を持っているんだ」、「日本からわざわざ輸入した錦鯉を飼っているんだ」というのを見せたいという人ばかりでした。富の象徴がそういったものになってきていると感じました。

日本人はもともと水を生で飲む民族です。海外に行くと生水を飲む習慣というのはまずありません。『チャイ』という言い方をしますが、まずお茶にして飲むことが多いです。だから本当の水の味はわからないと僕は思っています。でも日本人は「水が甘い」とか言います。もともと水に関しての意識が高いのです。引越した時に住みづらければ「この街はなんだか水が合わない」とか言います。そういう比喻が出てくるくらい水に対してはうるさい民族だと思います。



マレーシアの友達の家に行った時に「日本人は贅沢だ」と言われました。なぜかと聞くと「飲める水でお風呂に入っている」と言われたのは、ちょっとショックでした。日本は飲める水もトイレに流す水も全て同じ水です。海外では水が豊かではないのでヨーロッパも雨水を使ってトイレを流すし、食器を洗う水と飲む水と全て分けています。我々はその豊かさの中にいるので、気づきづらいんです。外から見ると違うということがすごくあります。

川上村の「水源地の森」は、本当に素晴らしい森ですよ。

(写真) この前来た時に撮らせていただいた川上村の「水源地の森」で撮った写真です。周りうっそうと茂っていて真ん中に水が流れています。本当に清らかな森から湧き出していますね。各地でいろいろな森を見てきましたが、川上村の「水源地の森」は本当に素晴らしい森ですよ。全く手つかずなんです。ほとんどの森は一度開発されて復活した二次林が多いんです。原生林というのは少ないです。川上村にはそれがまだ残っています。

(写真) 水の中から森を見上げた写真です。水が清らかな森があるということにびっくりしました。原生林は昼間も暗いです。川に行って上を見上げるとわかります。太陽が見えないくらい上が茂っています。これは照葉樹林特有ですね。こういった森はなかなかないです。「水源地の森」では、どこから上を見ても太陽がスカッと見えないくらい森が豊かでした。「これが本当の森なんだ」と僕はつくづく感じました。



(写真)川上村の本沢川の滝です。多分ここは水深が5～6mあるのではないかと考えていて、次の機会には是非ここにタンクを背負って潜ってやろうと思っています。屏風滝という場所です。日本の川の特徴の一つとして多雨というのがあります。屏風滝のすぐ隣には大台ヶ原がありますが、大台ヶ原の年間平均降雨量は並じゃないです。今年は九州の豪雨などもあったので例外かもしれませんが、今までの日本の年間平均降雨量は1,900ミリとかで2,000ミリありません。でも大台ヶ原は4,000ミリという量が降ります。この雨の量が多いことが日本の川を作っている要因の一つです。

(写真)静岡県の柿田川です。富士山の湧水で、ものすごく湧水量が多いところです。こんこんと湧いています。富士山周辺に降った水が何十年もかけて地下に染み透って湧き出しています。日本は、地下水も豊富だと言われています。

この柿田川で今番組を作っています。テレビ朝日の『奇跡の地球物語』です。柿田川はあまりにも美しく、非常においしい湧水が出るところです。ここは三島や熱海の方に水を流して水道水として使っています。僕も出演していて、柿田川の魅力を話しています。柿田川の水中の美しい映像などを見ることができます。

最近ニュースで北海道などの水源を海外の人が買っているというのをよく聞きます。日本人は地下水に対してあまり関心がないのですが、海外からすると日本の土地さえ買ってあげば地下水が出てくるのがわかっているので買ってしまおうということだと思えます。日本人はそういう危機感があまりありませんので、ついつい山を売ってしまったりします。世界中から日本の土地、水源の出る土地を買いたいという動きはあります。

日本には2万～3万本も川があると言われているんです。日本の川の特徴というのは国土の3分の2が山地で平野部がないので河床勾配が急なことです。源流から河口までの勾配がきついので流れが急です。外国人がこれを見たら川とは言わずに滝と言うと思います。外国ではどっちが上流だろうという川がほとんどです。日本では水が一気に海に流れ込んでいくので水が淀むことがないのです。だから水がきれいです。

(写真)川上村の三之公川です。ここに滝がありますが、周りは豊かなシオジやトチとかです。また思っていた以上に針葉樹が多いところでした。照葉樹林はカシ類を中心にした葉っぱがテカテカ光った照葉樹の森というイメージがあったんですが、実際に足を踏み込んでみたら、思っていた以上に北の方にあるような針葉樹のモミヤツガが目につきました。これが本来の姿だということがわかりましたが、このような森がおそらくかつては紀伊半島に広がっていたのではないかと推測できます。

(図)河床勾配です。メコン川などは長さが1,000kmを超えていますが、標高が200mぐらい

しかありません。だからゆっくりゆっくり流れていく。セーヌ川も 700km ぐらいの長さがある、ゆっくりゆっくり流れていく。

日本の川を見てください。紀の川なんて一気にです。ほとんど垂直に落ちてくるようなイメージです。大台ヶ原の向こうにある三重県の銚子川なんて長さ 20km に対して 1,000m 落ちるんです。もうほとんど川ではなく滝という感じです。そのぐらい日本の川と海外の川とでは差があるということです。

雨が多くて、河床勾配が急で、一気に下る。だから水が美しい。これは世界でも稀です。

そういった水を日本人はどういうふうに利用しようか昔から考えてきました。

放っておけばどんどん海に流れ出てしまって利用できない。そのために水を確保するところが必要になって、それでダムができたという感じです。やはり水を利用するためにはダムを作っておかないといくらでも水は出て行ってしまいます。



水源を守って公有化することは、とても意味のあることだと思います。

最近『水源林』という話をよく聞きます。僕の住んでいる和歌山県白浜町でも源流の森を買い始めています。それは『川は源流が全て』という意識が高まってきたからです。

(新聞記事)各地の自治体が自分のところで水源を確保しようということで買収をしています。一番最初は広島市が1998年に買ったのが最初です。奈良県の川上村は全国で2番目ぐらいですよ。何がすごかってその面積です。ずば抜けて広い。中には3とか2というのがあるぐらいです。話にならないぐらい川上村は広い森を持っています。2000年を越えてからは買っているところもありますが、この時代にこれだけの面積を買っておこうと思っただけに僕は拍手を送りたいぐらいです。「よくぞやってくれました」という気持ちです。

今後こういった水源を買っておこうという動きは加速していくと思います。その中でも川上村は先見の明があったのではないかと思います。

二番目に広いのは和歌山県の古座川です。NHKのハイビジョン特集『古座川』という番組で、僕はずっと撮影に通っていました。ここも水源はかなり古座川町が所有しています。水源を守って公有化していくということはとても意味のあることだと思います。

川上村の生き物についてお話ししたいと思います。

(写真)これは一番シンボリックな植物で、トガサワラというマツの仲間です。実はとても少ないです。世界中で紀伊半島の一部と四国にしかありません。日本の固有種です。葉っぱはツガに似ていて材がサワラに似ているのでトガサワラです。大きなものでは直径が1m、高さが30m以上になります。森と水の源流館にあるジオラマの真ん中にトガサワラがドンと置いてあるので見てください。川上村の森を象徴するシンボリックな植物です。

川上村のトガサワラはあまりにも数が多すぎて説明するのが大変です。川上村はトガサワラの宝庫みたいなところで、これだけの面積にたくさんトガサワラがあるのは僕も見ることがありません。歩くと下に小さいトガサワラの幼木がいっぱいありました。僕は和歌山県でずいぶんトガサワラを見て歩きましたが、大きな木はあっても、種から落ちた幼木というのは滅多に見ません。それがここにはたくさんあってびっくりしました。

(写真)これはモミです。同じ針葉樹でマツの仲間です。モミの仲間は葉っぱの付け根が吸盤みたいに丸くなっているのが特徴です。

(写真)ツガです。パッと見るとモミもツガもトガサワラもよく似ていますが、葉っぱを見れば違いがわかりやすいと思います。

(写真)キセルガイ、リュックガイと言われているものですが、実は大きさが1cm ぐらいしかありません。マルクチコギセルというキセルガイです。この貝は一生木から降りてきません。大きなトチやナラの苔の中に住んでいて、木が倒れたら生きていけないのです。その木の中で累々繁殖をしている貝です。マルクイチコギセルは和歌山県ではレッドデータブックという絶滅危惧種のカテゴリーの中で一番高いランクの 類に入っている貝ですが、三之公川や川上村の森の木には普通にいるそうです。これだけでもすごいことだというのがわかると思います。

(写真)トンボの仲間でムカシトンボです。最も古い形質を残しているトンボと言われていて、恐竜のいたジュラ紀からほとんど形が変わっていないと言われています。そのトンボの成虫です。幼虫はこんなひらべったい形です。清流に住んでいるんですが、びっくりするところは、親になるまでに7年間もかかるということです。その7年間の間に環境が変わってしまい、水が干上がってしまったらもう生きてはいけません。オニヤンマも3年間幼虫で過ごすので、その間に環境が変わってしまったら死んでしまいます。ムカシトンボは幼虫の期間が異常に長く、7年間です。だからムカシトンボがいるというのは、少なくとも7年間はその環境を保っていることがわかるということです。



(写真)ナガレヒキガエルです。渓流域に住んでいるヒキガエルです。平野にいるカエルとどこが違うかということ、平野のカエルは鼓膜が大きくて見えますが、このカエルは鼓膜が見えないというのが特徴です。音を聞く必要がなくなったから鼓膜がなくなったのだと僕は思っています。今日も午前中に川に潜ってきましたが、渓流に入ると「ザーッ」という音で他の音が聞こえません。カエルたちは繁殖時にメスを呼ぶ時などは「グワッ、グワッ」と鳴きます。鳴き声が大事な生き物です。似たような種類でも鳴き声の違いで、彼らはオスとメスを分けると言われています。その一番大事な鳴き声を流れでかき消されてしまうので鳴くことをやめたのではないかと思っています。小さく鳴くことはありますが、大きく鳴くことはありません。

大体5～6月が繁殖期になります。清流域に行けば見ることができます。流れのきついところなので流されないように口に吸盤がついています。こんなに大きな吸盤のような口をしたオタマジャクシは他にいないです。渓流に住んでいるカジカガエルのオタマジャクシも同じように口が吸盤みたいです。普通の平野部のオタマジャクシはこんな口はしていません。

(写真)オオダイガハラサンショウウオです。小型サンショウウオとダイサンショウウオは全く別のものです。ダイサンショウウオは特別天然記念物で1m50cmもある大きいのがいますが、それと小型サンショウウオは全く別のグループです。小型サンショウウオが大きくなったらダイサンショウウオになるのではないかとされている方がいますが、全く別のグループです。オオダイガハラサンショウウオはダイサンショウウオ以外のサンショウウオの中では日本で最大級です。全長で20cmぐらいにはなりません。名前からして大台ヶ原で見つかったものです。青光りしているかわいらしいサンショウウオです。小さな目がありますが、ほとんど目は見えていないと言われています。

オオダイガハラサンショウウオはどういうものか色々探しました。冬、12月ぐらいから山から谷にどんどん下りてきます。卵を産む場所は、アマゴが住んでいないようなV字谷と言われる川の源流のところですよ。孵化した子どもは1年間ぐらいは川の中で過ごすのでアマゴがいると食べられてしまいます。だから多分アマゴが住んでいないところで産卵するので。

(写真)和歌山県で撮ったもので、2月に雪の降る中を探しに行ってみつけた個体です。何度も通って3月にやっと卵が撮れました。これは岩を起こしたので撮れていますが、普通の状態では岩の下なので見えません。バナナ状の卵を岩ノ下に産み付けます。卵が孵化する直前の幼生には、エラがあって、頭が四角くて爪があるのが特徴です。

サンショウウオの仲間は、そうそう見つかるものではなく、実は探すのが大変です。和歌山県ではレッドデータブックの類です。将来は天然記念物にするという話が出るぐらい見つけることが困難になってきている生き物です。オオダイガハラサンショウウオが住



んでいるところを見ていくとやっぱり自然林が残っているところにしかいません。人工林ではなく、もともとの森が生き残っているところにごくわずかにいます。

(写真) ハコネサンショウウオです。三重県で撮ったものです。僕がこの13年で見ただけです。箱根から来ていますが、この仲間は他のサンショウウオと違って肺がないのが特徴です。紀伊半島のハコネサンショウウオはオレンジのラインがきっちり入るのでとても美しいです。全長が16cmでした。和歌山県ではこれもレッドデータの一番上に位置されているサンショウウオで、見ることはとても難しいです。

(写真) ブチサンショウウオです。最近の分類では小型ブチサンショウウオとなっています。これも和歌山県、奈良県に住んでいるサンショウウオです。こういった生き物は正面から見てみると実はかわいいんです。僕は生き物を見る時にいつも「かわいいな」と思って見ていて、どう撮ったらかわいく見えるかと思いながらシャッターを押しています。サンショウウオは地味ですが実はかわいいのです。

ブチサンショウウオは比較的数が多いサンショウウオです。こういったブチブチの模様が入っています。きれいな水のところにいますが、探す時は山の斜面の石をめくります。サンショウウオは夜行性で、雨が降った後の夜に活動します。それもちよこちょこと出てきて餌を食べるぐらいなので、なかなか人の目に触れることはありません。だから人の目に触れないうちにいなくなってしまうことが多々あります。サンショウウオがまだ森で見られるというのは自然が保たれているということの指標になるのかなと思っています。

**今ある自然、美しい水は  
未来の子どもたちに受け継ぎ、汚さずに渡していく義務があると思います。**

(写真) 川上村三之公川の森と水の写真です。何度も言いますが、上が見えないぐらい森が茂っていて水が豊かにある、この環境は地元の方は普通だと言いますが、今や普通じゃないのです。世界的に見てもこんなに水が豊かな日本、こんなに豊かな森を持っている我々は世界的に見て普通じゃないのです。

人間は豊かすぎるとわかりづらいのです。例えが悪いのですが、病気になって初めて健康のありがたさに気づくという感じに近いです。失って初めて「こんないいところに住んでいたんだ」、「こんなに水がよかったんだ」と気づくみたいな感じだと僕は感じていて、今だったらまだ取り戻すことができるのではないかと考えています。

(写真) これは川で泳ぐ子どもです。今ある自然、美しい水というのは未来の子どもたちに受け継ぐ、汚さずに渡していく義務があると僕は思っています。

今日も午前中に子ども達と一緒に川に行ったのですが、川でワーワー言いながら本当に

無邪気に遊ぶのですね。その環境はその子ども達の孫、そのまた孫まで伝えていくことが大事だと思っています。ここで終わらせてはいけないのです。だからもっときちっと水のこと、川のこと、環境のことを我々が考えていかなければいけないと思っています。

最後になるんですが、今回写真を趣味でされる方が非常に多いとお聞きましたのでカメラの話をしします。今まで僕が写真を撮ってきたカメラは、ハッセルブラッドという六六判のフィルムのカメラです。これを水中のハウジングケースに入れて使っています。これは特注です。僕は手が小さいのでアメリカ製のハウジングだとシャッターまで届かないのです。だから全て僕のニーズに合わせて特注で作ってもらっています。六六判なので水中で24枚しか撮れません。24枚撮ったら上がってきます。

ほかにペンタックスのLXやニコンF4というフィルムカメラも使います。今までお見せした写真と僕の本は100%フィルムです。デジタルは一切使っていません。僕はフィルムにこだわって撮っています。全ての作品作りはフィルムでやっています。

ハッセルブラッドの六六判の違うフィルムカメラは、重たくて面倒くさいカメラですが、それを担いで、陸上の景色も撮っています。

僕の話はそんなところです。ありがとうございました。



(本文中の写真は、当日上映された映像とは無関係です。)







## 『古事記にうつる源流の郷』

立正大学文学部教授

### 三浦佑之氏

(みうら すけゆき) 1946年三重県生まれ。成城大学大学院博士課程修了。

現在、立正大学文学部教授、千葉大学名誉教授。

著書に、『村落伝承論』(第5回上代文学会賞受賞)『浦島太郎の文学史』(以上、五柳書院)『古代叙事伝承の研究』(勉誠社)『口語訳古事記』(第1回角川財団学芸賞受賞)『古事記講義』『古事記を旅する』(以上、文藝春秋。いずれも文春文庫所収)『日本古代文学入門』(幻冬舎)『古事記のひみつ』(吉川弘文館)『日本靈異記の世界』(角川書店)『古事記を読みなおす』(ちくま新書)などがあり、最新刊に『あらすじで読み解く古事記神話』(文藝春秋)がある。

WEBサイト「神話と昔話 三浦佑之宣伝板」<http://www.miuras-tiger.com/>

2012年10月21日(日) 14:00~15:30  
川上総合センターやまぶきホール  
参加者 約180名

## はじめに

私をご紹介いただきましたように『古事記』をずっと考えております。今日お話することは、吉野に関わることですが、この場合の吉野というのは非常に広くお考えいただきたい。いわゆる神武東征と呼ばれる伝承で、初代の天皇の神武が日向から東へ旅をして、そして吉野を通して橿原宮に即位したという伝承を中心にお話をさせていただきたいと思えます。

私はちょうどこの川上の東北の方、現在は三重県津市に編入されています一志郡美杉村というところで生まれ育ちました。私は二度、山上ヶ岳の行場を歩いたことがあることが自慢で、中学生の時と高校生の時に行をしました。西の覗きで二度ぶら下げられ、「勉強するか」と言われて「しますします」と言いながら全然勉強をしなかったという思い出があります。洞川から山へ登ったというのを今でもよく覚えています。

川上村にも今もたまにお伺いしますが、私の故郷と大変よく似ていると思います。川上村の方が山深いと感じますが、私も山の中で過ごしておりますので、とっても落ち着くところだなという感じがしております。



## 『古事記』とは

よくご承知だと思いますが、『古事記』は上・中・下という3巻の書物からできております。その3巻の書物のうち『神話・神々の物語』というのが上巻にありまして、中巻の頭から天皇たちの物語が始まります。中巻には初代のカムヤマトイハレビコ（神武天皇）からホムタワケ（応神天皇）までが納められています。そして下巻にはオオサザキ天皇（仁徳天皇）からトヨミケカシキヤヒメ（推古天皇）という33代目の初めての女帝までが納められています。その3巻を合わせて『古事記』です。

『古事記』は和銅5年、西暦でいうと712年に編纂されました。今年がちょうど1300年ということで色々話題になって、マスコミなどでも盛んに取り上げられていますし、大騒ぎをしています。私もそのおかげであちこちに呼んでいただいておりますが、実は私は、序文自体は100年ぐらい新しいものだというふうに考えております。だから本文自体は、712年よりも古いのではないかと考えております。今年が一般的に1300年というふうに言われているのは序文にそのように書かれているからですが、序文自体はかなり疑わしい部分がありますので、そのまま信じることは難しいかもしれないという立場を私はとっております。でもそのことは置いておいてお話をみていきたいと思いません。

『古事記』の面白いところは、非常に魅力的なお話が多いところですね。様々な恋物語や戦いの物語、遠征の物語など、ドラマチックな物語がたくさん入っております。8年後の720年に作られた『日本書紀』という歴史書に比べると断然『古事記』は面白いお話です。『日本書紀』は本当に出来事・歴史が描かれていて、お話としてはあまり面白くない、そんな違いがあります。

## 国生みから、カムヤマトイハレビコの誕生まで

『古事記』は、まずイザナギとイザナミという神が現れて、二人が結婚してこの大八洲（おおやしま）を生み、そしてその島々に住んでいる神々をずっと生み出していくという物語があって、最後にイザナミは火の神、燃える火を生んでしまったので体が焼かれて大やけどを負って死んでしまいます。それで黄泉の国へ行って、それをイザナギが迎えに行くと連れ戻そうとしますが「見ないでくれ」と言われていたのに見てしまったので、連れ帰ることができなくなってしまいます。これはギリシャ神話などでも同じようなお話があります。追われて逃げ帰ってきて地上に戻ってきたイザナギは一人で体を清めました。穢れた体を川の水で洗って、アマテラス、ツクヨミ、スサノヲという3人の尊い子どもを生みます。その後は、アマテラスとスサノヲの話です。アマテラスは太陽の女神、スサノヲは何か恐ろしい力を持った神なのですが、その二人のことが語られていきます。

高天原で、スサノヲがあまりにも乱暴を働くのでアマテラスは岩屋にこもってしまいま

す。そしてアメノウズメが踊りを踊ってアマテラスを岩屋から引き出します。でも乱暴者のスサノヲをそのまま置いておいては、高天原はどうなるかわからないので、神々は皆で相談してスサノヲを追放します。そしてスサノヲは高天原という天空世界から地上に降りてきます。スサノヲは、地上に降りてヲロチ退治をします。有名な「ヤマタノヲロチ」という恐ろしい妖怪を退治して、生贄になるはずだったクシナダヒメという女神と結婚します。その2人の間に生まれた6代目の子孫として誕生するのがオホナムチという神様で、後にオホクニヌシと呼ばれる神様です。オホナムチは因幡の白兔を助けたり、根の堅州国へ行って冒険をして地上に戻り、地上の王者になります。それからヤチホコと名前を変えて越の国のヌナカハヒメという女神と結婚するという話が語られていきます。これらがいわゆる出雲神話と呼ばれる部分です。

そしてオホクニヌシが地上を見事に支配して芦原中つ国という世界を造りましたが、

高天原から見ていたアマテラスが「地上はなんて素敵な国だ。これは自分の子孫が支配する国だ」と、地上を自分のものにしようとしています。アメノホヒやアメノワカヒコの遠征軍を派遣しました。最後にはタケミカツチという神が降りてきてオホクニヌシ一族をやっつけました。息子たちをやっつけて、最後にはオホクニヌシに服属の誓いをさせました。「私は立派な社を建ててくれればそこに静まっている」という約束をさせたので出雲大社という大きな社ができました。

その平定させた地上にアマテラスの孫にあたるニニギという神様が降りてきます。これがいわゆる天孫降臨と言われる部分です。降りてきたニニギは、山の神の女神のコノハナノサクヤビメとお姉さんのイハナガヒメ姉妹と結婚します。川上村では山の神はイハナガヒメということですが、コノハナノサクヤビメだけ留めてイハナガヒメは追い返してしまいます。コノハナノサクヤビメとの間に生まれたのがいわゆる海幸山幸と呼ばれるホデリ（ウミサチビコ）、ホスセリ・ホヲリ（ヤマサチビコ）と呼ばれる3人の子供たちです。1番下のヤマサチビコが海へ釣り針を探しに行き、トヨタマビメという女神と結婚し、生まれたのがウガヤフキアヘズです。ウガヤフキアヘズがトヨタマビメの妹で叔母にあたるタマヨリヒメという女神と結婚してカムヤマトイハレビコが生まれたとなっています。

## 『古事記』にだけ伝えられている出雲の神々の物語

初代の天皇の誕生の物語はそのようにアマテラスからずっと系譜によって繋がれた物語が、古事記の最後のところに出てくるわけです。その部分を見ると、神話の舞台は高天原と日向の国が出てくるぐらいで、ほとんどが出雲を舞台にしています。後は高天原であり、最後は高天原から降りてきた御子達が、日向、高千穂に降りてきたとなっております。高千穂はどこかという問題はありますが、おそらく宮崎と鹿児島との境にある霧島連山あたりだろうと言われているので、九州南部を舞台として語られています。

出雲の神々の登場部分は、実は『日本書紀』という国家の正規の歴史書の中では、出雲

の神々の物語はほとんど語られていません。『古事記』にだけ伝承が伝えられているのが、この出雲の神々の物語です。

私は、出雲の神々の物語が語られている部分は、『古事記』などよりもずっと古い世界が描かれているのだらうと考えています。今日のお話は神武天皇のお話を中心ですのでそのことは置いておきますが、神話の流れは繋がっていて、天から降りてきたニニギの子孫として誕生したカムヤマトイハレビコの物語が、中巻の最初から語られていくということを少し頭において、この後の神話を見ていただければと思います。

そして初代の天皇のカムヤマトイハレビコというのは天皇なので、人間と言え言えるのでしょうが、神話的な世界がここには語られているというふうに見ていただけたらいいと思います。

## 神武東征

『日本書紀』には『古事記』よりも詳しく神武東征の部分を語っています。第1年目、第2年目、第5年目と、長い年月をかけて九州から大和へやってきたのだということが『古事記』にも『日本書紀』にも描かれています。

画面は、神武天皇が大和で即位してから2600年にあたる紀元2600年という年に行われた記念の大イベントの時のものです。紀元2600年と言われてもご存知ない方がほとんどだと思います。私も実際は知りません。西暦で言いますと1940年ですので、紀元2600年に生まれていたらおっしゃる方もこの中にもいると思います。72歳以上の方ならお生まれになっていらっしゃるかもしれません。おそらく80歳以上の方ならなんらかの形でこの紀元2600年のイベントについてご承知の方もいらっしゃるかもしれません。特に奈良県では橿原神宮を中心に大きなイベントが色々行われていますので、ご承知の方がいらっしゃるかもしれません。紀元2600年に文部省を中心に、神武天皇の遠征の道筋探しが国威高揚のために盛んに調べられたりした時に、代表的な学者たちが集まって大きな報告書が作られました。その報告書の中からの写真をご紹介しますながら、現在の様子をおりませてもらって話をさせていただきますと思っています。

初代の天皇がいつ橿原の宮で即位したかというのは、近代天皇制を作っていくうえで非常に重要なこととなります。つまり近代天皇制というのは、薩長が徳川幕府を倒して握った政権で、徳川幕府を倒したことを正当化していく必要があったわけです。そのためには古代以来の天皇制というのを新しい形で作り上げていくということが必要になりました。その中で最も大きく取り上げられたのが初代天皇のカムヤマトイハレビコ、いわゆる神武天皇です。その天皇の生誕はいつなのかというと、『古事記』には何も書かれていませんが、『日本書紀』には辛酉年という年に誕生したと書いてあります。干支で辛酉という年、辛酉年の元年に即位したと書いてあります。それは中国では革命が起こると考えられている辛酉という年に、天皇が初めて即位したとすることによって、初代天皇の即位と革命とい

うものが理にかなったものであると『日本書紀』は語っているのですね。簡単に言うと、ちょうど干支が1度回るのが60年、その干支が21回循環するその初めの辛酉という年に素晴らしい革命が起こるといいう『辛酉革命』という思想が中国の中にあります。それで計算をすると紀元前660年、日本では縄文晩期ということになりますが、その時代に初めて神武天皇が天皇になったというふうに、この歴史書を作った推古天皇の時代の歴史家達が考えました。

そこから計算すると、ちょうど明治23年の1890年が2550年、昭和15年が紀元2600年という区切りのいい年になるというので、色々なイベントをして国威高揚を働きかけていくわけです。その一つが東京オリンピックの開催、それともう一つは世界万国博覧会の開催です。それから靖国神社の整備というようなことが行われますが、結局戦争が激しくなると東京オリンピックも世界万国博覧会もできなくなってしまったといういきさつがあります。それで戦後になってようやく東京オリンピックが開催され、大阪万博が開催されました。おそらく戦前からの日本人の悲願としてあって、それが戦後によりやく行われたというふうに考えられます。それと併行して神武天皇の功労探しが始まるのですが、その根拠になっていったのが『古事記』、『日本書紀』の物語です。

『古事記』中巻の冒頭の部分です。「神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイハレビコノミコト)」と書き出されています。よくご承知の神武天皇の「神武」など漢字2文字の呼び方は『古事記』や『日本書紀』には出てまいりません。もっと時代が下って70年代の後半にならないと「神武」とか「天武」とか、漢字2文字の呼び方は出てまいりません。「カムヤマトイハレビコ」というふうに和風の呼び方をしているのです。





## 日向を出発し、大和へ

「神倭伊波礼毘古命、その伊呂兄（兄の）五瀬命と二柱、高千穂宮（九州の高千穂、鹿児島空港の少し北あたりにある高千穂神宮）に坐して議りて伝りたまひけらく、「何地（いづこ）に坐さば、平らけく天の下の政（まつりごと）を聞き看さむ。猶（なほ）東（ひむがし）に行かむ」と。

即ち日向より発して筑紫に幸行でましき。

故、豊の国の宇沙に到りましし時、その土人（くにびと）、名は宇沙都比古、宇沙都比売の二人、足一騰宮（あしひとつあがりのみや）を作りて、大御饗（おほみあへ）献りき。そこより遷移（うつ）りまして、竺紫（つくし）の岡田の宮に一年坐しき。」

まず日向（宮崎県の南の方）から出発して宇沙（宇佐神宮のある大分県の宇佐）に行き、そこにウサツヒコ、ウサツヒメという土地の支配者がいました。その人たちがご馳走を献りました。足が1本で高い建物があって、それは聖なる神を祀る神殿だと思われませんが、そこで歓迎を受けたというのは、この二人はやってきた神武天皇に服属したということを表しています。次に一行は竺紫（福岡県の岡田の宮）に行きました。これはよくわからないのですが、今の門司あたりにあるところだろうと言われていています。その九州の1番北の端に行きました。

そこから「阿岐の国の多黄祁理の宮に七年坐しき」。阿岐の国は広島県です。現在広島市の北東にあります安芸という街のことだろうと言われてはいますがよくわかりません。多祁理の宮というところに7年間住んでいたということです。なかなか先は苦しかったようで、7年間住んでいました。

「また、その国より上り幸でまして、吉備の高島の宮に八年坐しき」。これは岡山市の岡山港の中にある高島という小さな島のことではないかというふうに言われています。そこからまた東に上がっていくと「亀の甲（せ）に乗りて、釣りしつつ打ち羽拳（はぶ）き来る人、速吸（はやすひ）の門（と）に遇ひき」。これは釣りをしながら羽ばたきをしながらやってくる人がいる、速吸の門に出会ったということです。速吸の門は、一般的に豊予海峡のことだと言われてはいますが、道順から考えると明石海峡と考えたほうがいいと思います。「門」とは狭くなったところが「門」と呼ばれます。なので速吸の門というのは狭くなって流れが速い海峡のところを指す言葉です。だからどこでも構わないんだと思いますが、順序から言うと明石海峡あたりを過ぎて出会い、そしてその人物を呼び寄せたということだと思います。浦島太郎みたいな人だと思うんですが、浦島太郎とは関係ありません。

「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神」と答へ日しき。誰かと尋ねると、土着の神であると答えました。

「汝は海道（うみつち）を知れりや」と問ひたまへば、「能く知れり」と答へ日しき。海の道をよく知っているかと尋ねると、よく知っていると答えました。

「従（みとも）に仕へ奉らむや」と問ひたまへば、「仕へ奉らむ」と答へ日しき。お供

に仕えるかと聞くと仕えますと答えました。桃太郎さんのキジみたいです。

それで竿を指し渡して御船に引き入れて、「即ち名を賜ひて、槁根津日子（さをねつひこ）と号けたまひき」。槁根津日子と名付けました。サヲネツヒコはその後ずっとカムヤマトイハレビコのお供をして大和へ入ったのです。そして彼は大和国の国造りの親と言われるようになったのです。今は大倭神社という神社が天理の南の山辺の道にありますが、そのあたりを支配していた大豪族のヤマトノアタイ一族が彼らで、大和の国の造だと伝えられています。

これが明治以降の神武東征と言われるものの出発ですが、神武東征に関しましては、明治以降様々な絵画などに描かれていきます。

## 大阪湾から紀伊半島進入のルート

日向から宇佐へ行き、宇佐から筑紫へ行き、そこからずっと阿岐の国の多祁理宮に行き、吉備の宮へ行き、そこでサヲネツヒコという人物に会って、水先案内人にして東へ行って大阪湾に入る、という物語に展開していくわけです。

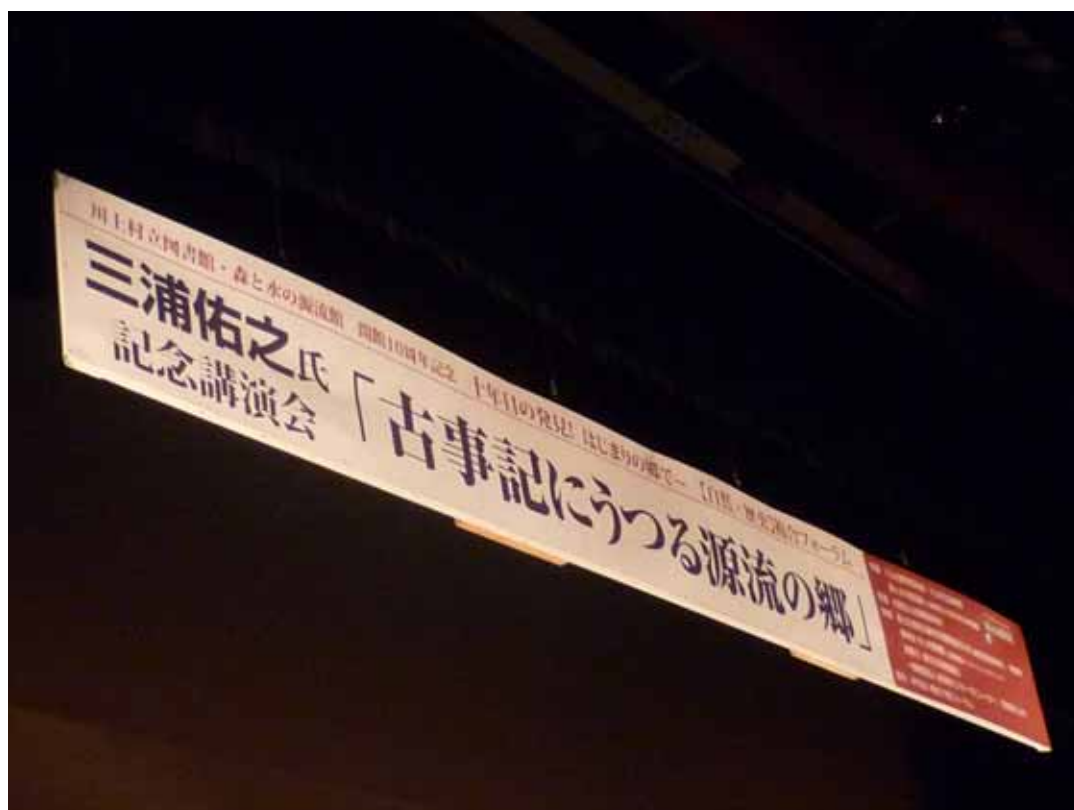
「故、その国より上り行でましし時、浪速（なみはや）の渡りを経て、青雲の白肩の津に泊てたまひき。この時、登美能那賀須泥毘古（とみのながすねびこ）、軍（いくさ）を興して待ち向へて戦ひき。ここに御船に入れたる楯（たて）を取りて下り立ちたまひき。故その地を号けて楯津と謂ひき。今に日下（くさか）の蓼津と云う」。船から降りて盾を立ててトミノナガスネビコという土着の豪族と戦おうとしたのです。

「ここに登美毘古と戦ひたまひし時、五瀬の命、御手に登美毘古が痛矢串（いたやぐし）を負ひたまひき。故ここに詔りたまひしく「吾は日神の御子として、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ（手傷を負いました）。今より行き廻りて、背（そびら）に日を負ひて撃たむ」と期（ちぎ）りたまひて、南の方より廻り幸でましし時、血沼の海に到りて、その御手の血を洗ひたまひき。故、血沼の海とは謂ふなり」。今まで東に向かっていたのに突然、「太陽に向かっていくのはよくない、太陽を背中に受けていこう」ということになったんです。それだったら午前中は休んで午後だけ行けば、東から西に行く場合は背中に太陽を受けることになるのですが、とにかくそういうことを言いまして、血沼から紀伊半島を南に廻ったということです。

日向から発ってずっと西へ行った、そしてその後このように大阪湾に入ろうとしたんですが、トミノナガスネビコという豪族に行く手を阻まれたというふうに語られています。トミというのは、生駒の河内と摂津と大和を挟んだ生駒山系の東側、そのトミノナガスネビコというのはおそらく生駒側の東に勢力を築いていた大豪族です。その大豪族が大和へ入ろうとしている遠征してきたカムヤマトイハレビコの一行と戦ったという伝承がおそらくここにはあるのだと思います。

古い時代、おそらく古墳時代の大阪湾は、河内湖と呼ばれる大きな湖になっていて、ず

っと中まで入れたので、日下の蓼津と呼ばれているところは生駒の西の麓あたりまでだっただろうと言われています。ちなみに大和川というのは近世江戸時代に河川改修が行われて現在はまっすぐ西に住吉大社のところで大阪湾に流れ込んでいますが、本来の大和川は河内湖に流れ込んでいまして、すごく大きな湖でした。だから本当なら大和へ入るのならそこ（大和川沿い）に入るのが1番の近道です。随からの使いなどがやってくると、浪速の都から川を遡って大和に入ってくるというルートで、それがずっと残っています。交通路として大和川は非常に古くから開けたところでありまして、この物語で日下の蓼津というところに神武が入ってきたという伝承を持っているということは、おそらく大和川を遡ろうとしたと思われます。ところが行く手を敵に阻まれて上陸することができなかった、だからやむを得ずもう1度こちらの南に回り込んで和歌山の方へ行ったというふうには読むことができます。



## 紀の川・吉野川は、吉野へのルートに使われたのか？

紀の国の男之水門（をのみなど）というところに行ったら賤しき奴が手を負ひてや死なんと言うので、男建（をたけ）びをしてそこで亡くなっただと続きます。和歌山市の紀の川の1番下流のすぐ川べりにある竈山神社というところですよ。古墳になっていて、ここが竈山の伝承地であるとなっています。今は竈山神社という官幣大社が建っておりまして、ここにイツセノミコトが葬られているということになっています。

ここでイツセノミコトが亡くなってしまいましたし、他の兄二人も既に亡くなっていますので、結局4人兄弟のうち生き残ったのは4男であるカムヤマトイハレビコだけになってしまいました。生き伸びたカムヤマトイハレビコはそこから一人で旅を続けていきます。

「故、神倭伊波礼毘古の命、その地より廻り幸でまして、熊野の村に到りましし時に、大熊髪（ほの）かに出で入りて即ち失せき。ここに神倭伊波禮毘古の命、にはかに遠延（をえ）まし、また御軍（みいくさ）も皆遠延て伏しき」。この遠延（をえ）というのは神の毒気にあたって倒れてしまうことを遠延（をえ）と言うんだろうと考えられますが、熊野に行ったら熊が出てきたというわけですね。こういうゴロ合わせというのは古代の伝承で非常に好まれる語り口なんです。おそらくダジャレみたいなものだと考えればいいと思います。熊野に行ったら熊が出てきた、それで皆その毒気にあたって倒れてしまった。天皇はじめ軍隊は皆倒れたということです。

「この時熊野の高倉下（たかくらじ）」その時に熊野の高倉下が「一ふりの横刀（たち）を賣（も）ちて、天つ神の御子の伏したまへるところに到りて献りし時、天つ神の御子、即ち寤（さ）め起きて」。横刀を持ってきたら目が覚めました。

「長く寝つるかも」と詔りたまひき。故、その横刀を受け取りたまひし時、その熊野の山の荒ぶる神、自から皆切り仆（たふ）さえき。ここにその惑（を）え伏せる御軍、悉に寤（さ）め起きき。故、天つ神の御子、その横刀を獲しゆゑを問ひたまへば、高倉下答へ日ししく」。高倉下はなんでそんな横刀を持っているのかと尋ねられて、夢を見たんだと答えるわけです。「己（おの）が夢（いめ）に、天照大神、高木の神、二柱の神の命以ちて、建御雷（たけみかづち）の神を召（よ）びて詔りたまひけらく、（高天原の夢を見ました）『葦原の中つ国はいたくさやぎてありなり』」。大変子孫のカムヤマトイハレビコは苦労をしているらしい。「我が御子等たち平（やくさ）み坐すらし。その葦原の中つ国は、もはら汝が言向けし国なり。故、汝、建御雷の神降るべし』と」。中つ国は建御雷が平定したから建御雷が行って助けてやってくれと天照が言うんで、すると建御雷はもうあんなところには行きたくないと言うんです。それでどうしたかということ、「ここへ答へ日ししく、『僕（あ）は降らずとも、もはらその国を平むけし横刀有れば、この刀を降すべし』」。その横刀は佐土布都、甕布都という名を持つ横刀なんです、これは現在石上神宮に祀られている横刀です。長さやの横刀ではありません。別の横刀ですが石上神宮の神宝として祀られています。その横刀があると言うんです。

「この刀を降さむ状は（さま）は、高倉下が倉の頂（むね）を穿（うか）ちて、それより墮し入れむ」。その横刀を降ろすのは高倉下が穴を開けてその穴からポロンと落としてやればいいと。

「故、阿佐米余玖（あさめよく）汝（なれ）取り持ちて、天つ神の御子に献れ』と。」そうしたら高倉下は朝の目覚めよく、お前がそれを苦しんでいるカムヤマトイハレビコのところに持っていけという夢をみた。「故、夢の教の如（まにま）に、且（あした）に己が倉を見れば、信に横刀有りき。故、この横刀を以ちて献りしにこそ」と。その夢の教えのままに夜明けに己の倉を見てみたら、本当に横刀があったのでその横刀をここに持ってきましたと。

「ここにまた、高木の大神の命以ちて覚（さと）し白しけらく、「天つ神の御子をこれより奥つ方に莫（な）入り幸でまさしめそ。荒ぶる神甚（いと）多（さは）なり。今、天より八咫鳥（やたがらす）を遣はさむ。故、その八咫鳥引道（みちび）きてむ。その立たむ後（あと）より幸行でますべし」とまをしたまひき」。そういうふうの高木の神、高木の神というのは天照大神の相棒なのですが、その相棒の高木の神がそのように教えました。それでカムヤマトイハレビコの一行は熊野から八咫鳥という大きなカラスの導きを受けて吉野の山の中へ入っていったというふうに語られるわけです。

『日本書紀』では金のトビということになっているのですが、『古事記』では金のトビは出てまいりませんで八咫鳥が出てまいります。この八咫鳥というのはご承知の通り熊野大社のお札などに出てくる、サッカーの日本代表のマークにもなっている3本足のカラスです。3本足のカラスは太陽の使いだと考えられています。



地図で見ますと、吉野へ熊野の方から回るといのは大変な道ですよ。今でもどうやって来るんだろうと思うほどです。実は最初は東から山を越えて、本当は生駒を越えて大和へ入ろうとした、けどそこには大きな敵がいて跳ね返されてぐるっと回ったということです。ぐるっと回って、どこを登ればいいのかということですが、考えてみたら1番わかりやすいルートというのは、この森と水の源流館があるから言うわけではありませんが、紀の川を遡るのが1番入りやすいんです。吉野に入るのは紀の川を遡っていけばいいのです。先ほど出てきた神武天皇が遠征の時に留まった男之水門という紀の国の港、ちょうど紀の川の1番河口部分ですが、ここの神主さんに聞くと、紀の川は、今はそんなに広くないですが、古い時代はものすごく広くて海みたいな河口だったというお話でした。その河口のところにある紀の国の港が男之水門と呼ばれる港でした。そしてそこにゴトビキ岩と火祭で大変有名な神倉神社があるんです。神倉神社は熊野に神武天皇が至ったところであるという記念碑なども建っています。この神倉神社が高倉下が横刀を持ってきたところだとされています。神倉神社には高倉下も祀られていて、その熊野であるとされています。

「故、その教え覚しの隨（まにま）に、その八咫鳥の後より幸行でませば」。八咫鳥についていくと、「吉野の河の河尻に到りましし時、釜（うへ）を作（ふ）せて魚（うを）を取る人有りき。ここに天つ神の御子、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は鬻持之子（にへもつの子）と謂う」と答へ日しき〔此は阿陀の鵜養の祖〕。その地より幸行でませば、尾生る人、井より出で来りき。その井に光有りき。ここに「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は井氷鹿（ぬひか）と謂う」と答へ日しき〔此は吉野首等の祖なり〕。即ちその山に入りたまへば、また尾生る人に遇ひたまひき。この人巖（いはほ）を押し分けて出で来りき。ここに「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は石押分之子（いはおしわくの子）と謂う。今、天つ神の御子幸行でましつと聞けり。故、参向へつるにこそ」と答へ日しき〔此は吉野の国巢の祖〕」。というふうに語られています。「吉野の河の河尻」とありますが、普通は川尻と言えば下流の方を指します。大体この現在の和歌山市からずっと大和に入っているのが紀の川で、吉野に入ったら吉野川と呼ばれる川になるものです。「吉野の河の河尻」という場合には、この川の下流の方と考えるのが1番わかりやすいです。今現在私たちがいるところは川上ですから、吉野川の川上というと1番上流ということになります。

『古事記』の文章を見ていくと、本当に熊野から吉野川の川尻にどうやって行くのかということになります。だからこの文章にはどこか問題があるのだということです。私は『口語訳古事記』を書いた時に、この河尻というのは間違いではないのかと思ったのです。これまでの『古事記』の研究者も色々言っていて、河尻ではなく川上の間違いではないのかと言っていたりします。そう考えますと熊野からずっと入って吉野川の川上、つまり上流に入って、そこからずっと川沿いに下ってこの橿原の宮に着いたと考えると非常にわかりやすいです。ところが吉野川の河尻というのはおかしいです。しかも「尻」と「上」を間違えたというだけならいいのですが、そういうふうに言い切れないところがあります。

吉野に入って一行が最初に出会うのは川で釜（魚を捕る竹のカゴ）を伏せて魚を捕る人です。おそらく鮎をとっていたと思います。天つ神が誰かと尋ねたら、名は二ヘモツノコと言いました。二ヘ（贄）というのはご馳走のことです。そのご馳走を持っている者。つまり川の漁を専門にする川の漁師であると言いました。注がついていまして、彼らは阿陀の鵜飼であると語られているんですね。阿陀という地名ですが、奈良県の方々はよくご存知だと思いますが、吉野川の上市からずっと下っていったところの五條市に東阿田や西阿田という地名があります。紀の川は鵜飼がずっと残っていて、今でも和歌山県の有田市には復元された徒歩（かち）鵜飼という鵜飼が残っています。紀の川の上流の有田川で、歩いて鵜を使いながら鮎を捕るという漁法がありますが、阿陀の鵜飼というのはおそらくこの紀の川、あるいは吉野川の下流の方で鵜飼をする人たちのようなことだろうと思われまます。そういうふうに考えますと、1番最初に吉野で会った場所がこの阿陀だと考えるなら、これはどうみても紀の川を遡ったと考える方がわかりやすいです。ある段階で神武東征というのは色んな話があって、古い段階では紀の川を遡っていたのではないかと、そしてその後次第に南に回って遠回りをして熊野へ行くという話が加わっていくことにより、段々とカムヤマトイハレビコの旅は苦勞話が大げさになっていったのではないかとこのように考えられるわけです。

物語というのは色んな話がくっついて段々尾ひればっかり大きくなっていくという傾向がありますから、そういう点では紀の川を遡るよりは熊野から入ったほうが苦勞は何倍にもなるのです。そういうふうな形でこの物語は発展していったのではないかと私は最近考えています。





## 井氷鹿の伝承

とにかく阿陀へ行きました。そしてその阿陀を出ると今度は尻尾の生えている人が井戸から出てきて、名前を聞くとイヒカだと言いました。これが川上の井光（イカリ）とつながっています。私も伺いましたが、その井氷鹿（イヒカ）という跡があります。そしてここには、明治 33 年に建てられた「神武天皇御休跡井氷鹿の地」という石碑が建っています。

そこには窪地があって、それがイヒカの出てきた井戸だとされています。井戸というのは古代で言えば泉だとされています。今は水は湧いてませんが、泉があったのかもかもしれません。ただし、この井氷鹿という土地も本当に吉野の川上の井光という土地を指しているかどうかというのは極めて疑わしいというか、よくわからないのです。なぜかという、先ほど言いましたようにお話というのはどんどん作られていって、色んな話が付け加えられていくことによって土地はあちこち広がっていくものです。

尻尾のある人というのも、山で働いている人たちの毛皮の尻あてだというふうに解釈する人もいます。尻あてかもしれませんが、物語の世界で言うと、猿みたいな人で、野蛮人を指す言い方として、よくあるのです。自分たち天皇に服従しない者は野蛮なる者だという発想がこういう物語にはあります。土地に住んでいる人たちをそのように軽蔑して呼ぶみたいな、そういう呼び方が出てきます。別に尻尾があるわけでもないし何でもないわけですが、物語としてはそのように呼ばれていくのです。

その次に出てくるイハオシワクノコモやはり尻尾が生えていると呼んでいます。ツチグモと呼んだり、尻尾があるという呼び方は、服属しない人々を呼ぶ呼び方だとお考えただければいいのだらうと思います。

## 吉野の国巢から宇陀、そして檀原へ

イハオシワクノコは吉野の国巢の祖と語られていますが、吉野の国巢は、今は吉野町に西国栖など地名が残っています。その浄見原神社という神社では国栖奏というお祭りが 2 月 11 日に伝えられています。ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、非常にゆったりとした舞が 4 人の舞手によって舞われます。そういうお祭りが残っていて、それも神武天皇の東征と関わっているんだというふうに伝承されています。

そして、今度はそこを踏み越えて宇陀に出たとなっています。「宇陀の穿（うか）ち」と言えば今は宇陀に宇賀志という地名が残っています。そうしますとずっと北へ遡って行ったということになりますが、道順からして紀の川から遡ってきたとしたら、ずっと南へ入っていったということになりますし、熊野からきたとしたら、北へ上っていったということになります。ところがその穿でエウカシとオトウカシという宇陀を支配していた土着の豪族の兄弟たちをやっつけたということです。そのやっつけ方ですが、兄貴がお仕えしなすと言ってだまして殺そうとしたのですが、弟が裏切って兄が反逆しようとしていると力



ムヤマトイハレビコに告げるわけです。それで兄貴がやっつけられて弟が天皇に服属すると語られています。

「その地より幸行でまして、忍坂（おさか）の大室（おほむろ）に到りたまひし時、尾生土雲（つちぐも）八十建（やそけたる）、その室に在りて待ち伊那流（いなる）。待つてウーッと唸って威嚇をしていたんです。

「故ここに天つ神の御子の命（みこと）以ちて、饗（あへ）を八十建に賜ひき」。そしてその敵どもをやっつけた、という菟田の高倉山の物語があります。

その後、「丹生之川上へ入る」という物語に展開していくわけです。占いをしたという話が出てきますが、実はこの部分は『古事記』には出てこずに、『日本書紀』に出てくるのです。丹生之川上というところの丹生之川で神武天皇はうまくいくかどうか酒を入れた瓶を川に流して占いをしたところ、鮎がたくさん浮いてきました。それを見てこの戦いは勝利するのだということを確認したというふうな物語が『日本書紀』にはあります。顕彰会では、丹生川上神社の中社だと言われています。中社はちょうど三つの支流が流れ込んでくる川合のところ、合流地に丹生之川上神社の中社が建てられています。現在はその中社から道路を挟んで真向かいの川の中洲のような出っ張りのところに石碑が建っています。



そこから磐余邑へずっと下りていったというふうに語られていくわけです。磐余邑と言われているのは、現在の檀原神宮に近く、当時の磐余邑は、今とは全然違って住宅も何もないような田園地帯でした。そこに建てられています。今は住宅街と言いますか、ちょっとわかりにくい感じです。今は顕彰碑が残っています。紀元 2600 年の慶祝会というふうに書かれた石碑です。

『日本書紀』によればそこから鷄邑に行ったとなっています。これはトミノナガスネビコがいる生駒の東の麓です。そしてそこでトミノナガスネビコをやっつけて、ようやく大和を制覇したというわけです。生駒市のちょっと郊外の丘の上に鷄邑と呼ばれる記念碑が建っています。現在の富雄川の向こう側の丘の上です。

後はもう一つ狭井河という顕彰碑が大神神社の脇に建っています。スケヨリヒメと結婚した時の記念の物語がありました。大神神社から歩いて 10 分ぐらいのところですよ。

最後に日本書紀で神武天皇が神の啓示を受けた鳥見山というところがあります。磐余邑のすぐ隣です。

「故、かく荒夫琉（あらぶる）神どもを言向け平和（やは）し、伏はぬ人どもを退（そ）け撥（はら）ひて、畝火の白栲原（かしはら）の宮に坐しまして、天の下治（し）らしめしき」。という、その白栲原というのは実はずっとどこにあるかわからなかったのですが、明治になって白栲原の宮というのが造られました。紀元 2550 年の記念に、檀原神宮が整備されて、畝傍山の麓に立派な神社が造られました。

この檀原神宮の大鳥居の前の両側に建っている「檀原神宮」という大きな石碑は、昭和 15 年に大阪市が紀元 2600 年の記念に建造して寄付した記念碑です。



(本文中の写真は、当日上映された映像とは無関係です。)

## おわりに

時間がないので端折ってしまいましたが、これらが神武東征という物語です。『古事記』と『日本書紀』に語られています。そしてその中でこの川上村は井氷鹿という形で出てきます。せっかく川上村に来て私がお話をさせていただいて、じゃあ井氷鹿ってなんなのかということですが、この井氷鹿を含め、物語としてはいろいろな形で伝えられていて、この川上村の山の中のあの窪地が井氷鹿の伝承地としてあるということです。ただ本当にそこにカムヤマトイハレビコが、遠征の旅の途中でやって来たかどうかは、もっともっと考えなければなりません。それよりもなぜそのような物語ができたのか、ということのほうを考えやすいのではないかと思います。

壮大な宮殿である橿原神宮は、拝殿に行くと「ここへ神武天皇が鎮座したのは明治 23 年、1890 年のこと」だと書いてあります。だから初代天皇がこういう形で祀られるようになったのは本当に近代になってからで、122 年前ということです。

橿原神宮から少し北の方へ行った畝傍山の北側に祀られているのが神武天皇陵は、壮大な古墳ですが、実はこれは幕末に造られたものです。宮内庁に今残っている畝傍山北東陵の成功例と書いてあって、完成図と書いてあります。そして実はそれ以前の神武陵と言われていたものは、地元の人には神武田と書いてジブタと呼んでいました。一枚の田んぼの中に盛土がありまして、そこが神武の墓だと言われていたのです。本当に小さな盛土、それがこのような壮大な古墳に造り替えられた、それが幕末の文久年間です。そしてそれから次第に整備されて明治 23 年に橿原神宮と同様に造られていったといういきさつを持っているのです。宮崎市にあります八紘一字の塔と呼ばれている塔も紀元 2600 年に造られています。

ですから初代天皇のカムヤマトイハレビコという天皇がどのような天皇だったかと考えると、紀元 2600 年というのは非常に大きな年だったと思います。

このように神武天皇にかかわる流れが、現在の私たちまでつながる様々な近代の出来事となって起こってきました。私たちは物語と歴史というものを改めて考えてみたい、そういうふうに思っています。

全然まとまりのない話をしながらもう時間が過ぎてしまいましたが、改めて井氷鹿という地名からずっとたどって古事記の天皇の成立の物語を考えていくことというのは、今の時代の中で私たちにとってはとても大事なことなのではないのかと思います。この問題はうまく整理しきれていないのですが、改めてこれからも考えていきたいと思います。

ありがとうございました。

## 編 集 後 記

---

当財団では、昨年度まで「水源地の村からの提言」と題したシンポジウムを毎年行ってきました。まちの人々にも寄っていただきやすい場所で、山村地域の魅力を発信したいとおもいで、橿原市内の駅前の会場を借りて開催してきました。

今年、森と水の源流館と川上村立図書館と同様、当財団も設立10周年を迎え、4月より公益財団法人への移行を果たすこともできました。この記念すべき年に、今年は本拠地川上村に帰って、なにかこれまでとは違うことに挑戦したいと考えていました。

昨年冬を迎える頃、川上村教育委員会と村立図書館のスタッフから相談がありました。「お互いの10周年記念事業を、何かいっしょにやらないか」というものでした。10周年が同じなら、1周年も3周年も5周年も、同じであったはず。しかし恥ずかしながら、いっしょにやった実績は、何もありませんでした。

実はこれこそが、「10年目の発見！」でした。そして森と水の源流館のメインテーマである自然、そして図書館のフィールドである文学や歴史物語の切り口で川上村の魅力を発信し、2倍の成果を目指して、会場をいっぱいにとしようと、企画に取りかかりました。

終わってみれば、あっという間の1年間、たくさんの人々に応援をいただきました。快く講師を引き受けていただいた内山先生、三浦先生。助成金支援をいただいた社団法人近畿建設協会のみなさま、後援・協力をいただいた団体のみなさま。企画段階や告知段階においてさまざまなかたちで、勉強させていただき、協力いただいたみなさま。そして当日ご来場いただいたみなさま。ありがとうございました。

素晴らしいことは、それら出会わせていただいた人々が2倍になったということです。森と水の源流館、図書館、それぞれの動きの中だけでは出会えないような方々と知り合わせていただきました。みなさまとは今回の講演会だけでなく、この縁を今後もつなげ、広げていきたいと思えます。

この報告書作成にあたり巻頭には、主催者あいさつにかえて、吉野歴史資料館池田館長より寄稿をいただきました。ご多忙の中、無理を叶えていただけたことに心から感謝申し上げます。文中に「自然に包まれ、日々の営みが繰り返され、積み重なって歴史は成り立っていく。」とありました。すべてのことはかわりあって、意味を成していく。今年のこの出来事も意味あることとして残るように、次のかかわりへとつなげていきたいと思えます。しかしやはり「やまぶきホールは大きい！ いっぱいにするのは、しんどい！」これが正直な感想ですが、それ以上に、人に出会うことの楽しさを実感できた年でした。

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語  
事務局長 尾上 忠大





はじまりの郷。はじまりの十周年。

森と水の源流館

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平  
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388  
<http://www.genryuu.or.jp>